

## ランドルフ・チャーチルの死

小関 隆

### はじめに：無念の死

「野党の庶民院議員団長を5年やって、それから首相を5年やって、そうしたら死ぬだろう。」1885年暮れの総選挙後、将来について問うた友人に対し、ランドルフ・チャーチル（以下、単にチャーチルと記す場合、ランドルフ・チャーチルを指す）はこう答えた。10年後の1895年1月24日、予言とも響くことば通り、彼は死亡する。しかし、予言が的中したのはこの部分だけだった。野党ならぬ与党の庶民院議員団長にはたしかに就任したが、その期間はわずか数ヵ月、首相の座ははるかに遠かった。「ランドルフ・チャーチル卿が抱いた志が満足させられることはなかった」。無念の死だったに違いない。<sup>1</sup>

死因は梅毒であった。フォスターによれば、チャーチルが自らを蝕む病の深刻さをはっきりと自覚したのは1882年、したがって、冒頭のことばは単なる軽口としてではなく、深い諦念を伴いつつ、それでもなんとか政治的栄達を遂げたいという思いを表現したものとして、受けとるべきだろう。ほぼ間違いなく、彼は梅毒に起因する麻痺がいずれ全身に及ぶことを覚悟していたのである。<sup>2</sup> もちろん、政治家のみならず人間としての評価にとっても致命的なこの病の事実を秘匿すべく、最大限の努力が払われた。1895年1月3日、チャーチルの妻ジェニー<sup>3</sup>は実妹リオニに宛てて次のように書いている。「... これまでのところ、一般の公衆は、そして社交界の人々でさえ、本当の真実を知りません。この6ヵ月、私はすべてを犠牲にし、惨めな思いもしたわけですが、にもかかわらず真実が知られてしまったら、それはつらいことでしょう。真実が知られれば、彼の政治的な声望や評価は計り知れず傷つくでしょうし、私たちの誰もが嫌な思いをするでしょう。」<sup>4</sup>

以下では、ポスト・ディズレイリ時代の保守党で急速に台頭し、影響力を存分に振るおうとした矢先に躓いたチャーチルという風雲児の最後の日々と死、そして死後の彼をめぐる語りや記念・顕彰行為<sup>コメモレイション</sup>を検討する。

## 1 上昇と転落

まず、チャーチルの政治的キャリアを概観しておこう。第七代モールバラ公爵の三男として1849年に生まれたチャーチルは、1874年から庶民院議員を務めていたが、1877年に父がアイルランド総督に就任したため、ディズレイリ政権期にはウェストミンスターよりもアイルランドで多くの時間を費やした。見聞と人脈を力に、彼はアイルランド問題のエキスパートとして保守党内での地歩を固めてゆく。しかし、彼の存在に注目が集まるのは、1880年の政権交代以降、「第四党」<sup>5</sup>の先頭に立って、保守党の庶民院議員団長スタッフォード・ノースコウトを圧倒する激しさでグラッドストーン政権を批判するようになってからだった。文句なしの家柄をもち、挑発的な弁論とパフォーマンスに長けたチャーチルは、まもなく党内の若手の旗手と目されるようになる。<sup>6</sup>

栄達を目指すチャーチルには、2つの戦略があった。1つは、1881年に死亡したディズレイリの後継党首の座を狙う2人の有力候補、ノースコウトと貴族院議員団長ソールズベリ侯爵のうち後者を支援し、前者に代わって庶民院議員団長の地位を得ることである。両雄が並び立つ状態は長くつづいたが、結局のところ、心臓に病を抱え、「第四党」の台頭を前に庶民院の討論でも影の薄い存在になりつつあったノースコウトでは、ソールズベリに太刀打ちできなかった。1885年6月に第1次ソールズベリ政権が成立するかなり前から、両者の争いには実質的に決着がついていた。ノースコウトを追い落とそうとするチャーチルの戦略の見通しは良好であった。<sup>7</sup>

ちょうど自由党のジョージフ・チェンバレンに対応するように、議会外での演説を得意とし、大向こうの喝采を得ることができるという点で、チャーチルは保守党におけるピカイチの存在であった。そんな彼が足場を議会外に求めようとしたのは、不思議なことではない。うるさ型の若手という地位からさらに上昇するためのもう1つの戦略は、有権者と日常的に接する位置にあった保守党協会の結集体 = 保守党協会全国同盟<sup>8</sup>を拠点に党内での発言力を強めることであった。<sup>9</sup> 1884年2月に全国同盟評議会議長のポストを得たチャーチルは、大胆な党改革を提唱する。眼目は、彼のことでいえば、保守党を「ポピュラーにする」こと、つまり、一般党員の声が党指導部の方針に充分反映されるようにすることであった。しかし、党の有力者からすれば、こんな提案は馬鹿げていた。全国同盟は議会党を補助す

る存在にすぎず、一般党員が党指導部や議員団の行動を拘束することなどあってはならない、これが彼らの認識であり、提案ははねつけられた。重鎮たちの拒絶を前に、チャーチルに勝ち目はなかった。しかも、彼にとって大事だったのは、党改革よりも自身の栄達の方であった。1884年7月26日、ソールズベリとの間で以下のような合意が成立した。すなわち、チャーチルは全国同盟評議会議長の座を退き、後任にはソールズベリの信任が篤いマイケル・ヒックス・ビーチ<sup>10</sup>が就く。その代償に、チャーチルは党の指導者としてしかるべく処遇され、また、党指導部はプリムローズ・リーグ（後段を参照）の存在を承認する。挫折したとはいえ、チャーチルは首尾よく党中枢へのパスポートを手に入れたわけである。<sup>11</sup>

プリムローズ・リーグとは、「第四党」の面々が中心となって、1883年11月17日に創設された政治団体である。「宗教、国制、帝国覇権の護持」を3大目標とし、1891年にはメンバー数が約100万に達したこの「ヴィクトリア時代で最大の大衆的政治組織」は、世紀転換期におけるポピュラー・コンサヴァティズムの浸透に決定的な役割を果たした。<sup>12</sup> 注目すべきは、プリムローズ・リーグというネーミングである。プリムローズはディズレイリが愛したとされる花であって、ディズレイリの命日＝プリムローズ・デイ（4月19日）には、プリムローズを身につけ、プリムローズでディズレイリの銅像を飾りつけることが恒例となっていた。プリムローズ・デイの広がりによってインスパイアされたチャーチルらは、プリムローズ・リーグを創設してプリムローズの名をわがものとし、衰えぬ人気を誇るディズレイリの後継者を自称したのである。ディズレイリのようになること、チャーチルの短い政治的キャリアを貫いていたのはこの願いであった。彼のディズレイリ気取りについて、リベラル・ユニオニストのジョージ・J.ゴウシェンはこう書く。「...彼が随分と離れた所からディジー [ディズレイリ] を模倣したように、彼よりさらに道徳的に低劣な者たちはチャーチルを模倣するかもしれません。」<sup>13</sup> 本稿の冒頭で見たチャーチルのことばもまた、ディズレイリへの憧れを表現するものといえる。

1885年6月に第1次政権を樹立した時、ソールズベリはチャーチルにインド担当相のポストを与えた。ノースコウトはイーズリ伯爵として貴族院に移ることとされ、ヒックス・ビーチが後任の庶民院議員団長となった。貴族院から少数派政権を率いるソールズベリにとって、グラッドストーンやチェンバレンに伍して庶民院で論陣を張る能力をもつチャーチルは、明らかにノースコウトよりも貴重な存在であった。チャーチルのキャリアが頂

点に達したのは、翌1886年である。第1次アイルランド<sup>ホーム・ルール</sup>自治法案への激しい反対の弁舌でプレゼンスを一層増した彼は、7月に成立した第2次ソールズベリ政権では蔵相と庶民院議員団長を兼務した。保守党および政権においてソールズベリに次ぐ実力者の地位を獲得したのであり、上昇戦略が上々の成果を収めたことは争われない。しかし、ソールズベリは、チャーチルの率いる議員団が「第1ヴァイオリンがある旋律を弾き、私自身を含めて、他の全員は別の旋律を弾きたいと思っているオーケストラ」になっていることを早々に見てとった。孤立を深めるチャーチルは、形勢逆転を期して、1886年12月、軍事予算の大幅削減を含む予算案の承認を得られなかったことを理由に、蔵相辞任を申し出る。慰留を期待していたことは間違いない。しかし、チャーチルの申し出はソールズベリにとって渡りに船に他ならず、彼は慰留することなく後任の蔵相にゴウシェンを起用した。以後も庶民院議員の地位に留まるとはいえ、まだ37歳だったチャーチルの政治生命は事実上ここで絶たれた。チャーチルの場合、上昇に劣らず、転落もまた急速だったのである。<sup>14</sup>

もちろん、ディズレイリのような政治的成功を収めたいという野心をチャーチルがあっさり捨てたわけではない。「たった1つの座、首相の座だ。パスになってみたい。手綱を握ってみたい。」これは、1887年3月、最も親しみを感じていた政治家の1人である自由党のローズベリ伯爵にチャーチルが吐露した思いである。たとえば、1887年12月から1888年1月にかけてロシアを訪問し、ツァーリと会談した際には、対ロシア政策に関する提言をまとめた長文の報告書をソールズベリに提出して、復権への足がかりを得ようと試みている。しかし、ソールズベリの反応は冷淡であった。また、1890年には、自らが党派をこえる政治家であることを演出する狙いからだろうか、ウィリアム・ハーコートをはじめとする自由党議員と協力し、パブ等の営業を規制する酒類販売免許法案を提出したが、幅広い支持を獲得することができず、法案は第1読会後に廃案となった。おそらく、蔵相辞任以降、チャーチルが最も注目されたのは1893年の第2次アイルランド自治法案を激しく攻撃した時であり、『タイムズ』によれば、彼くらい「頻繁に演壇で語った野党 [保守党] の主要議員はいなかった」。<sup>15</sup> しかし、病の進行ゆえ、かねてから嚙蹙を買ってきた激情的で場をわきまえない彼の無礼な言動は、この頃には一層目に余るものとなっていた。演説自体も混乱してとりとめがなく、聞きとりが困難だったことも少なくなかったため、

報道の扱いは段々と小さくなってゆく。「1894年春には、父が深刻な病に冒されていることは誰の目にも明らかとなった。彼は依然として政治活動をつづけた。… こうした努力はどんどん不出来になっていった。」息子ウィンストンがこう記す通り、生涯最後の議会会期において、チャーチルの姿は哀れを誘うものだった。『タイムズ』は、「ある公平な観察者」のことは紹介している。

彼が衰えてゆく姿はあまりにも哀切であり、17-18年前のブリリアントな討論をする彼を覚えている誰もとって、ただ痛みと悔恨の感情しかありえなかった。あの頃、通路脇のフロント・ベンチに陣取るスマートな若者くらい大胆かつ周到な者はいなかった。… そんな場面を覚えている者たちには、若くもなければ年老いてもいない、そのことばが今ではいらいらとして効果のないものとなってしまったうちひしがれた男が、かつて庶民院を率い、討論のヒーローと目されることがありえたという事実は、嘘のようだった。… おそらく、これほど一気に、これほど完全に転落し、議場の称賛が全面的な哀れみに変わってしまった例は、これまでになかった。びくびくとしたふるまい、失われてゆく記憶、抑制のきかない声、そしてなによりも悲しいのだが、かつての能力と勇気が失われたという明確な意識、これらを記述することなどできない。… われわれの時代の庶民院で、これほど悲劇的な光景が見られたことはない。

イトトン校時代以来の友人ローズベリは、憐憫の情を込めていう。「幕が降りることも、引退することもないまま、彼は公の場で1インチ刻みに死んでいった。」<sup>16</sup>

## 2 最後の旅

「一時はきわめて輝かしいそれになることを約束されていたキャリアの早すぎる終幕」が、間違いなく近づいていた。1894年6月27日、チャーチルは世界一周旅行に出発する。きっかけは医師団<sup>17</sup>から少なくとも1年間の政治活動停止の指示を受けたことだった。たしかに、政治活動の継続がもはや不可能であることは、衆目の一致するところであった。同年5月27日にチャーチルを訪ねた友人の印象はこうである。「彼はひどく変わってしまい、衰えだつた。私は麻痺だと思うが、なにか病気が進行していて、そのため彼の演説に耳を傾けることもつらいほどだ。」<sup>18</sup>

ただし、医師団は世界一周旅行を勧めたわけではない。彼らはロンドンの近くでの転地療養を考えていたのであって、「私たちの忠告に背いて」チャーチルが旅に出ようとする際には、同行するジェニーとキースに対し、病状が悪化したら即座に帰国することを強く要請した。医師団が世界一周旅行を最終的に容認したのは、おそらく、長旅の負担を回避したとしても、チャーチルが病を克服できるとはしよせん思えなかったためである。彼らが考えていた転地療養も効果はさして期待されておらず、どちらかといえば気休めに近かった。出発に先立ち、医師団は、チャーチルの余命が1年とないことをジェニーにはっきりと通告した。病の進行を少しでも遅らせられたら、というはかない希望も込められてはいただろうが、ジェニーがあえて旅に同意した一番の狙いは、不穏な言動を繰り返すようになっていたチャーチルを関係者から引き離し、評判がますます悪くなる事態を回避することだったと思われる。旅先でも、できるだけチャーチルを人々から遠ざけるよう、配慮が必要であった。1894年11月18日、ラングーンからマドラスへの途上、ジェニーは実姉クララに宛てて書いている。

イングランドを発って以来、話ができるような人とはほとんど会っていません。...最悪なのは、彼のために、人に会う機会さえも私が怖れてしまうことです。彼はとても人づきあいができるような状態にはありません...彼がどんなふるまいをしてしまうか、誰にも予期できません。シンガポールのガヴァメント・ハウスでの2日間、彼は実に状態が悪く、知らない人たちと同席するのは恐ろしいことでした。その時に比べれば、彼は随分おとなしくなり、時として本当に無気力だったりしますが、キースはこれは悪い兆候だと考えています。<sup>19</sup>

出発前に話を戻そう。出発に先立つ数日間は、グロウヴナー・スクエア（ロンドン）のモールバラ公爵夫人邸<sup>20</sup>での友人たちとの会食に費やされた。バルフォア、ヒックス・ビーチ、ジョン・モーリ、等、招かれた者たちには二大政党の大物が多く含まれ、豪華な顔ぶれによる別れの宴となった。ウィンストンが記す通り、「友人たちは彼に会うことが二度とないであろうとわかっていた」ものと思われる。首相の任にあったローズベリは、会食に出かけるべきか否か、逡巡していた。「今になっても、会食をしたいのか、会わずにおきたいのか、自分の気持ちをはっきりさせられない。... 会えばつらいだけだろう。しかし、別れの機会を逃したくもない。このことについて考えると、どうしても気持ちが重くなってしまう。」会食には結局赴か

なかったようだが、チャーチル一行が出発する6月27日、ローズベリは見送りのためにユーストン駅まで足を運び、チャーチルをいたく感激させた。半年後には半昏睡状態で帰国するのであるから、ローズベリはまさに最後のチャンスをつかんだわけである。ウィンストンによれば、チャーチル自身も「残された時間がきわめて短いことを完全に理解していた」<sup>21</sup>

同じく6月27日にリヴァプールから出航した一行は、ニューヨーク、バンフ、ヴァンクーヴァー、等に滞在した後、サンフランシスコ発で横浜に向かう。日清戦争の最中だったため、横浜港はものものしく警備されていた。横浜到着の時点でチャーチルの容態は「きわめて悪」く、暑さを避けるため、宮の下（箱根）の富士屋ホテル（チャーチルの名が記された宿帳も残されているという）に3週間ほど逗留することになる。「宮の下での3週間にわたる完全な静養はランドルフを大いに回復させた」とジェニーは記しているが、それでも、片腕に麻痺の症状が現れ、顔面の筋肉の一部が機能しなくなり、さらには足が衰弱する、といった調子で、病状は確実に悪化していった。「素晴らしい健康状態」にあるので、帰国したらさっそく演説に赴きたい、などと書くパティントン（チャーチルの選挙区）の保守党協会に宛てたチャーチルの手紙も、額面通りには受けとれないだろう。その後、東京、日光、京都、等を経て、一行は神戸から日本を離れる。<sup>22</sup>

アジアを巡回する旅は、香港、広東、シンガポール、ラングーン、という経路を辿った。<sup>23</sup> 次なる目的地はチャーチルが訪問を熱望していたマンガレイ<sup>24</sup>だったが、マンガレイではちょうどコレラが流行中だったため、一行はマドラスへ向かい、そして、ここでチャーチルの容態が一気に深刻化する。「私たちは何ヵ月かインドを旅して回るつもりだった。しかし、その頃までは旅を楽しめるくらい良好だったランドルフの状態が、突如として駄目になった。これ以上旅をつづけることは断念しなければならなかった。ボンベイまで出てから、私たちはイングランドに向けて出航した。」カイロ、マルセイユを経て、一行がドーヴァーに到着したのは12月24日、半昏睡状態で車椅子に乗せられたチャーチルは、ウィンストンの表現を借りるなら、「身も心も幼子のように脆弱かつ無力」であった。<sup>25</sup>

ドーヴァーまで出向いたモールバラ公爵夫人やウィンストンに伴われて、チャーチルはヴィクトリア駅経由でモールバラ公爵夫人邸に運び込まれた。死の床のチャーチルにはおよそ1ヵ月の時間が与えられるが、若干の浮き沈みはあっても、容態がはっきりと好転することはなく、昏睡に近い状態が支配的だった。医師団にできることは延命措置だけであった。1895年1

月16日には心肺機能の障害が顕在化し、親族に召集がかけられた。1月23日に発表された医師団の容態報告はいう。「…ランドルフ・チャーチル卿の心臓の活動はきわめて衰弱しており、脈拍は弱く、しかも急である。卿の容態は非常に危機的である。」<sup>26</sup>

翌24日の早朝、妻と母、2人の息子（ウィンストンとジョン）、等に看取られながら、チャーチルは息をひきとった。享年45歳であった。この間容態を再三問い合わせてきた女王からのそれをはじめ、弔電が次々と届けられた。ソールズベリへの返信で、モールバラ公爵夫人はチャーチルの蔵相辞任のエピソードに言及している。「彼は貴方に対して最大限の称賛の念を抱いていました。彼と一緒に、貴方はなにかを成し遂げられたかもしれません。しかし、彼は若かったのです。そして、認めてしまうのは悲しいことです。間違っていたのです。それゆえ彼は痛手を被りました。このことを思うと、私の心は張り裂けそうです。…もうすべては終わってしまいました。私の愛する息子は死ぬために家に戻ってきました。今になって彼が理解され評価されても手遅れとは、なんとつらい行き違いでしょう。」  
「愛する息子」を失い、悲嘆にくれる母から見ても、チャーチルの政治的転落の主因は彼自身の「若さ」「間違い」に他ならなかったのである。<sup>27</sup> それでは、彼女がいう通り、世を去った今、チャーチルは「理解され評価されるようになったのだろうか？ 次にこの点を検討したい。

### 3 死後の評価

『タイムズ』の死亡記事から見てみよう。チャーチルの政治的キャリアを総括することばは、「多くの点に関してわが国の政治史では比類のない」「不思議な流星のようなキャリア」というものである。全面的な礼賛ではなく、留保を伴った評価であることを予想させる表現といえる。もちろん、死亡記事であるから、好意的なくだりも含まれている。すなわち、「ベコンズフィールド卿 [ディズレイリ] がその力を呼び起こすうえでかくも大きな役割を果たした民主主義」を大胆に持ち込み、旧弊にくすぶる保守党に新風を吹き込んだ「トーリ民主主義」の旗手、といった賛辞である。ディズレイリに結びつける語りは、チャーチルが聞いたら喜ぶものだっただろう。しかし、紙面の多くはむしろ批判的なコメントに充てられる。特にクローズ・アップされるのが、「素晴らしい幸運の重なりを乱暴に自らの手で台無しにしてしまった」蔵相辞任のエピソードである。「政権の存続にとって自



分は欠かせないと信じていた」のは「深刻な読み間違い」であり、辞任によって生じた不信感から「彼の評判が回復されることはなかった」。政治家としてのチャーチルには、以下のような評価がくだされる。

ランドルフ・チャーチル卿が名声を獲得したのは、議会および演壇における激烈な闘士としてであった。彼は決して政治的な思想の持ち主ではなかった。どんな事柄に関してであれ、事柄の表面からさらに掘り下げることはなかった。彼には、知的ないし道徳的な原則は備わっていなかった。文学的な教養の痕跡を示すことも、まったくではないにしても、ほとんどなかった。

雄弁の能力は抜群であり、ある種のポピュリストとしてのセンスには恵まれていたかもしれないにせよ、知性と一貫性を欠き、栄達への野心ばかりが前に出て、傲慢でもあった政治家、『タイムズ』が描くのはこうしたチャーチルのイメージである。<sup>28</sup>

葬儀翌日の1月29日の『タイムズ』論説もチャーチルを改めて論じているが、その趣旨は死亡記事とほとんど変わらない。新しい時代に適應できずにいた保守党にとって、チャーチルの登場が重要な意味をもったことが、まずは前向きに評価される。「ランドルフ・チャーチル卿は、大いに必要とされていた刺激を与えた。もしかすると、いささか乱暴なやり方で。ほとんどなんの手順も踏まずに、彼は患者の鼻先にアンモニアのボトルを突きつけたのである。したがって、患者の目覚めはやや急であり発作的であった。しかし、処置は効果的であった。もっとマイルドな処置だったら、失敗したかもしれない。…この処置の結果、全国で保守党の組織が再建されていった。」しかし、チャーチルは「なんらかの知的な方法によってというよりも本能と気質によって」台頭した政治家であり、「大胆さ」をはじめとする資質はもっていたものの、欠点も多かった。結論的な評価は次のようになる。「その才能にもかかわらず、忍耐強く、念入りに、建設的にことを進める政治家としての資質を、彼はもたなかった」。プリリアントではあったかもしれないが、「彼は偉大な政治家ではなかった」のである。<sup>29</sup>

『タイムズ』に限らず、ジャーナリズムの評価は総じて手厳しい。息子は今では「理解され評価され」ている、という母の見方は、あまりにも楽観的だったといわねばならない。一例として、『スペクテイター』の論調を紹介しよう。名家に生まれたチャーチルは、「完璧な大胆さ」「疲れを知らぬエネルギー」「人気を獲得する才能」「物事の細部に迫る能力」等、優れ

た資質の持ち主だったが、結局のところ、「近年最高のミュージック・ホール弁士」にすぎなかった。せつかくの資質を「本能的な乱暴さ」が損なってしまったからである。「血の中を流れる猛毒のようなもの」ゆえに、彼は衝動的かつ無責任に行動した。「時にきらめくような政治的洞察力を見せ、栄達は迅速であったが、同僚たちは決して彼を信頼しなかった。1886年、内閣が屈服することを期待して彼が辞任した時、内閣はぐらつかなかった。それ以降、彼は政治的には無であった。」ディズレイリを目指したチャーチルの無念をあざ笑うかのように、最後の一文はこう断言する。「彼が首相になれなかったことで、イングランドはきわめて深刻な危機を逃れた。」<sup>30</sup>

もちろん、チャーチルを高く評価した例もある。たとえば、プリムローズ・リーグの機関紙『プリムローズ・リーグ・ガゼット』がそうである。プリムローズ・リーグの活動にはさして熱心でなかったとはいえ、チャーチルはなんといっても創設メンバーの1人であり、死ぬまで指導部にあたるグランド・カウンスルに席を占めていたのだから、礼賛調の記事が載ってもまったく不思議ではない。しかし、実際に掲載された記事の内容は全面的な擁護論とはいいいがたい。

プリムローズ・リーグに属すわれわれは、彼の墓に花を贈った。しかし、われわれ自身が花輪なのである。宗教、国制、そして帝国を支えるために解かれることのない絆で結ばれた100万にも上るイングランドの男性や女性こそ、彼がベコンズフィールド卿の伝統に施した解釈の生き証人である。ランドルフ・チャーチル卿は、なによりもリーグの創設者なのである。...

...

大いなる誤解の対象となったが、ランドルフ卿は単純に誹謗中傷を見下し、厳しい時期にあってさえ、トーリの大義への献身において一時たりとも動揺することはなかった。プリムローズ・リーグが誇りとするに相応しい創設者といえよう。

墓に花を贈ることから始める書き方に込められているのは、チャーチルをディズレイリのイメージに引きつけ、できれば「第2のプリムローズ・デイ」のようにチャーチルを追悼したい、との思いだろう（後段の「ユニオニスト・デイ」の提案を参照）。とはいえ、この文章が称揚するのはあくまでも「リーグの創設者」としてのチャーチルであって、彼の国政への貢献が評価されるわけではない。蔵相辞任の決断が正当化されることも、第一線からの急速な転落が嘆かれることもないのである。チャーチルに関する

「大いなる誤解」を解くために為されるのは、「トーリの大義への献身」を指摘して、一貫性の欠如という評価に反駁する程度のことにはすぎない。趣旨はプリムローズ・リーグの機関紙として創設者を誉めそやすことにあり（その内容自体はどんな政治団体でもするであろう線をこえるものではない）政治家としてのチャーチルの名誉回復は必ずしも図られていないといえる。<sup>31</sup>

つづいて、政治家たちがチャーチルをどう語ったかを見てみよう。彼らの発言の多くは追悼の文脈に置かれるものだが、その分を割引かねばならないほどの高い評価は稀である。ある種の才気はあっても政治家に必要な能力を欠き、人間的にも問題が多かったため、結局はさしたる成果を収められなかった、といったイメージは、多くの政治家たちに共有されていた。党派によって微妙なニュアンスの違いはあるものの、チャーチルをディズレイリの後継者に見立て、「トーリ民主主義はランドルフ・チャーチル卿に発している」と捉えて（保守党のF.シーガー・ハント）、あるいは、保守党を民主主義の方向へと牽引したのはチャーチルだとの構図を描いて（リベラル・ユニオニストのデヴォンシア公爵、ダービ伯爵、自由党のH.H.アスキス）、チャーチルの一番の貢献を保守党に与えたインパクトに見る者は多い。そして、チャーチルの資質、すなわち、「雄弁と結びついた才能の輝かしさ」（保守党のロンドンデリ侯爵）、「敵対している者をも惹きつけることばの輝きと力」（ハーコート）、「怖れを知らぬ勇氣」（自由党のライオネル・ホランド）、「天才的な眼力」（アスキス）等を称揚することについても、党派をこえた一致が認められる。チャーチルが備えていた豊かなポテンシャルを称えつつ、このポテンシャルが全面的に開花しなかったことを惜しむ、これが政界におけるチャーチル評価の基調だったのである。<sup>32</sup>

2月16日の『タイムズ』には、一風変わった角度からチャーチルを評価しようとする文章が掲載された。彼とチェスをした経験をもつ通信員が、「通常のそれをはるかにこえる技術」をもつチェス・プレイヤーとしてのチャーチルを語る手紙である。「R.チャーチル卿のチェスは、書物の知識や偉大な名人たちと頻繁に勝負することから得られる力にはどうしても欠けていましたが、独創的かつ大胆であり、時としてブリリアントでした。彼と何度もプレイしたことのある筆者の見解では、ランドルフ卿は大変に優れたプレイヤーとなるために必要なすべての素質（忍耐力だけは例外かもしれませんが）をもっていました」。チェスという切り口は新奇でも、描かれるチャーチルのイメージ（「独創的」で「大胆」、「ブリリアント」だが「忍

耐力」を欠く)は上述したそれに驚くほど類似している。<sup>33</sup>

#### 4 葬儀とコメモレイション

チャーチルの葬儀は、1月28日、モールバラ公爵家の邸宅ブレナム・パレスから遠くないブレイドン(オクスフォードシア)のセント・マーティン教会において執り行われた。ブレイドンに搬送されるため、遺体は当日の朝にグロウヴナー・スクエアを出発したが、遺体を収めた棺が皇太子から贈られたものだったのはなんと皮肉なことといえる。<sup>34</sup> 遺体の上には、ローレル、ユリ、ヴァイオレットの花輪が置かれた。他にも花輪が贈られてきたが、ディズレイリの葬儀で注目を集めたプリムローズのそれは見られず、また、女王をはじめ王族からの献花もなかった。激しく雪が降る中でありながら、パディントン駅へ向かう葬列に参加する者、それを見物する者は多数に上ったという。<sup>35</sup>

葬儀当日には、ローズベリの実請に基づき、ウェストミンスター寺院でも追悼の礼拝が行われた。ブレイドンの葬儀があくまでも私的な性格のものであったこともあって、政治家や著名人は基本的にこちらに参列した。皇太子の代理人、ローズベリ、ソールズベリ、デヴォンシア、バルフォア、ヒックス・ビーチ、ハーコート、さらにはアメリカやドイツの大使、俳優のヘンリ・アーヴィング、といった錚々たる顔ぶれであり、車椅子生活のためブレイドンでの参列を断念したモールバラ公爵夫人も姿を見せた。<sup>36</sup>

チャーチルにかかわる他のコメモレイションについても見ておこう。おそらく、ブリテンの政治家にとって最高の榮譽といってもよいのは、ディズレイリがそうだったように、議事堂前のパーラメント・スクエアに銅像を設立されることであるが、立ち並ぶ銅像の中にウィンストンのそれは含まれているものの、父のそれはない。政治家としての実績からすれば、無理からぬことである。それでも、庶民院内の主階段にはチャーチルの胸像が設置されている。胸像設置のプロジェクトが動き出したのは1896年4月、歴代の庶民院議員団長にはなんらかのコメモレイションが行われてきた、というのがプロジェクトを提唱した保守党議員エリオット・リーズの言い分であった。胸像設置の合意は比較的容易にとりつけられ、1897年4月までに集められた263名の庶民院議員および元議員からの募金をファンドとして、ブレナム・パレスに置かれる等身大のチャーチル像をつくったウォルドウ・ストーリーに胸像の制作が委嘱された。<sup>37</sup>

胸像がW.H.スミス<sup>38</sup>のそののちょうど向かいに設置されたことは、巡る因果といえるかもしれない。というのも、「第四党」とともにチャーチルが台頭するにあたり、ノースコウトやりチャード・クロスと並んで、保守党内の守旧派の代表格として攻撃のターゲットとされたスミスは、陸相の立場からチャーチルの予算案に盛り込まれた軍事費の削減に最も激しく反発し、蔵相辞任のきっかけをつくった人物だったからである。チャーチルに代わって庶民院議員団長に就任したのも、スミスに他ならなかった。1891年10月、死亡したスミスの後任にバルフォアが就いたことを知らされたチャーチルは、政治的復権の見通しが完全に絶たれたことを自覚したらしく、ローズベリに宛ててこう書いている。「辛抱に辛抱を重ねて、私は潮目が変わるのを待ってきました。しかし、潮目は未だに変わりません。当面のところ、変わることはないでしょう。... 私は疲れ果てており、すべてのことにもううんざりです。もはやこれ以上政治の世界に留まるつもりはありません。」いわば仇敵であったスミスと、チャーチルは死後に再会することとなったわけである。同時に、スミス並み、というのが、チャーチルに対する政界の冷静な評価だったとも推測される。<sup>39</sup>

1898年4月18日、胸像は時の蔵相ヒックス・ビーチによって除幕された。当日は月曜日であり、翌日のプリムローズ・デイに合わせることも可能だったはずだが、そうした配慮はなかったらしいし、除幕の任を担ったのが首相ソールズベリでも第2の実力者バルフォアでもなかったという事実にも、チャーチルに対するどこか醒めた姿勢を見ることができよう。除幕式の演説で、ヒックス・ビーチは、募金が党派をこえて集められたことをまず最初に強調した。「この胸像のための募金を行ったのは、その歴史のきわめて波乱に富んだ時期に、彼が実に大きな刺激を与え、活気づけ、ポピュラーにした政党のメンバーだけではありません。ランドルフ卿や私たちと政治的見解を同じくしないにしても、それでも、... 彼をほとんど無名の議員の地位から庶民院議員団長にまで押し上げた類稀なる勇氣、不屈さ、決意の固さへの高い評価を示したいと望む他の多くの人々も募金リストに加わっています。」党派をこえた「高い評価」の指摘はディズレイリを「ナショナル・ヒーロー」として造形する際にも見られたものであるが、<sup>40</sup>チャーチルの場合、「高い評価」を受けるのはあくまでも「勇氣」や「不屈さ」といった資質であって、政治的な実績ではない。そして、「政治家として以上に、私たちは友人として彼を愛しています」と述べ、ヒックス・ビーチの演説はセンチメンタルなトーンを強めてゆく。

私自身、きわめて強い政治的な共感と私的な友情という絆に結ばれ、長年にわたって彼と交友する幸運を得ました ...もっと語ることもできますが、ある種の感情はことばにできないほど深いのです。私の人生で最も幸せだった日の1つは、ランドルフ卿が庶民院議員団長の席に就くのを見た日です。そして、最も悲しかったのは、彼がその地位を退いた日であり、プリリアントなキャリアの終焉、苦痛に充ちたあまりにも早い終焉を印すためのウェストミンスター寺院での厳粛で感動的な礼拝に出席した日です。

私的な回想に収斂するこの演説には、ディズレイリを「ナショナル・ヒーロー」に仕立てた語りのような力はない。「プリリアントなキャリア」が全面的に開花することのないまま「あまりにも早い終焉」を迎えてしまった、という前節で見たような常套的イメージが繰り返されるばかりなのである。<sup>41</sup>

この時以降、チャーチルの胸像が特別の注目を集めることはなかった。パーラメント・スクエアのような公共の場にはなく庶民院内に設置された胸像にアクセスすることは一般の人々には困難であり、胸像を焦点とする記念行事など企画されようもなかった。第2次大戦中に議事堂が爆撃を受けた際にも、チャーチルの胸像は損傷を免れ、現在も同じ場所に置かれている。おそらく、なんの変哲もない多くの胸像の1つとして。<sup>42</sup>

伝記というかたちのコメモレイションには胸像プロジェクトよりも早くから手が着けられ、1895年春には最初の伝記が出版された。著者はチャーチルと親しいつき合いのあったT.H.S.エリオット、政治的キャリアから私生活までをカヴァーする内容であった。エリオットの次のような書き方は、ディズレイリに憧れつづけたチャーチルのはかない望みを代弁していたのかもしれない。「... 1月24日は4月19日と同様の保守党の儀式によって聖別されるに値する。今後、「ユニオニスト・デイ」が「プリムローズ」デイに劣らぬくらい広くかつ熱意をこめて連合王国中で祝われるべきである。」チャーチルはディズレイリに匹敵するほどの重要人物だったのだ、これは親しい友人による鼻屑の引き倒しともいうべき主張だろう。この伝記に対する『タイムズ』の書評は厳しく、「政治家としてのランドルフ・チャーチル卿についてのエリオット氏の高い評価に同意することは難しい」と述べたうえで、「ユニオニスト・デイ」の提案を「きわめて馬鹿馬鹿しい」と一蹴している。評者によれば、「彼は高邁な意味における政治家ではなかった」。エリオットの提案に同調する声は一向に広がらなかった。さきに紹介した

『プリムローズ・リーグ・ガゼット』にも同様の期待が見え隠れしていたが、実際のところ、プリムローズ・デイと並ぶ「ユニオニスト・デイ」などまったく問題外だったのである。<sup>43</sup>

### むすびに代えて 孝行息子ウィンストン

ディズレイリに範を求めたチャーチルは、生前においても死後においても、ディズレイリに比肩しうる存在とはならなかった。2人の間には、1世紀以上にわたって祝われたプリムローズ・デイと実現される気配のなかった「ユニオニスト・デイ」ほどの大きな開きがあったといわねばならない。そして、蔵相と庶民院議員団長を数ヶ月務めただけの政治家が、死後にさしたるコメモレイションの対象とならなかったこと自体は驚くに値しない。「一流になりそこねた政治家」を待ち受ける当然の運命である。むしろ、ウェストminster寺院で追悼の礼拝が行われ、庶民院内に胸像が設置されただけでも、充分すぎるくらいだったと思われる。チャーチルが特別に冷遇されたわけではないのである。

しかし、チャーチルへの評価が総じて低く、その記憶が段々と忘却されてゆくことに納得できない人物がいた。ウィンストンである。当初、エリオットのそれよりも本格的なチャーチル伝は、彼の書簡や遺稿を管理する立場にあったカーズン子爵が著す予定だったが、父の「目的を跡づけ、記憶を正しく論証する」ため、ウィンストンは代わって執筆することを申し出る。ローズベリの仲介を得てカーズンらを粘り強く説得し、1902年には文書類へのフル・アクセスが確保された。伝記はウィンストン自身の政治的キャリアが激動する（1904年に保守党を離れ、翌年には自由党のキャンベル・バナマン政権の植民地担当次官に就任する）中で執筆され、自由党が総選挙において歴史的圧勝を収めた（自身も保守党の地盤であったマンチェスターで勝利した）1906年1月に刊行の運びとなった。提示されたのはほぼ全面的な擁護論である。結語の部分を紹介しよう。

完成に至らなかった、悲劇的だった、という思いは残るものの、彼の生涯は目的と見解に関する調和と統一性を見せている。... 1874年総選挙後の議会ですっかりあげ、1880年総選挙後の議会で提唱した原則と確信は、彼を終生導くものであった。彼が保守党を揺さぶり、ほとんど支配した時期が短かったのは、驚くべきことではない。いったんは保守党内で権力を獲得したことが、驚異的なのである。...

彼の性質と政策には、破滅にも成功にも必要なすべての要素が含まれていた。1880年から1885年にかけて提唱した原則が彼の上昇をもたらしたのだとしたら、それらの原則はまた転落をもたらしもした。彼はすべての誓約を誠心誠意実践した。変わったのは政府なのである。…ランドルフ・チャーチル卿はまったく変わることはなかった。外交政策についても国内政策についても、軍備についても歳出についても、アイルランドについてもエジプトについても、彼は同じことを考え、発言した。大臣の職に就いている時も、それ以前と変わらず。永久に政権から離れた後も、同じことを繰り返しつつけた。国民の間に彼が喚起した希望、彼が行った約束、国民から彼に寄せられた大きな支持と名誉が、精力的な努力を求めているように思われたのだ。…

いずれの政党の目録にも、ランドルフ・チャーチル卿の名が残されることはないだろう。その力を彼が大いに強めた保守党も、その最良の原則のいくつかを彼が明確に支持した自由党も、同じように複雑な思いで彼の生涯と業績を見ているに違いない。彼の時代には、政治家のキャラクターや地位は党派の基準で計られた。… 党派色の強い賛辞や非難は、彼の最終的な声望に影響を与えることはない。彼の重要性をかつて評価した物差しは壊れてしまった。これからの時代には、新しい評価基準が生まれるだろう。

「党派の基準」をこえた「新しい評価基準」によってチャーチルを改めて評価することを求めるのである。孝行息子らしく、ディズレイリを持ち出すことも忘れていない。「恩顧を得て順調に身を立ててゆく道は、彼には開かれていなかった。王族の好意という光り輝く推進力が彼の旅路を助け、加速させることもなかった。彼が獲得したすべての権力は不承不承与えられたものであって、早々に奪い去られてしまった。ディズレイリと同じく、前へ進もうとするあらゆる一步一步について、彼は戦わなければならなかった。」<sup>44</sup>

ウィンストンのチャーチル伝は1週間で2300部以上を売り上げ、大きな注目を集めた。「並外れた人物のヴィヴィッドな評伝」、「歴史学と政治哲学の双方に対する重大な貢献」等、書評も概して好意的だった。この伝記の刊行がチャーチル再評価のきっかけとなったことは、まず間違いない。<sup>45</sup>とはいえ、この伝記がどれほどの影響力をもったにせよ、チャーチルの名が現在でも記憶されているとすれば、それはやはりなによりも「ウィンストンの父」としてだろう。伝記の執筆以上に、ウィンストンの政治活動そのものが父の記憶を永らえさせることに貢献したわけであるが、「第2次大戦を勝利に導いた宰相」の圧倒的なプレゼンスを前に、チャーチルは「父」



の役割に甘んじなければならなかったのである。

## 註

- 1 Times, 25,26 Jan.1895.
- 2 R.F.Foster, *Lord Randolph Churchill: A Political Biography*, Oxford, 1981, pp.58-9, p.72, pp.96-7.
- 3 ジャネット・ジェローム。『ニューヨーク・タイムズ』の大株主でもあった投資家レナード・ジェロームの次女として、1854年にブルックリンで生まれる。1874年に始まるチャーチルとの結婚生活は、1880年代半ばには事実上破綻した（1892年頃から好転の兆しを見せる）。プリテン皇太子をはじめとする幾多の男性と浮名を流したことで知られる（チャーチルの方も同様の噂と無縁ではない）。Ibid., p.18, p.271, p.308, pp.346-50, p.379.
- 4 Ibid., p.219.
- 5 保守党、自由党、アイルランド・ナショナリスト党につづく4番目の党を意味するが、実際には保守党の若手の小グループ。1880年総選挙で当選した無神論者チャールズ・ブラッドロウの宣誓拒否を激しく攻撃したことで脚光を浴びる。チャーチル以外のメンバーはジョン・ゴースト、ヘンリ・ドラモンド・ウォルフ、アーサー・パルフォアであり、パルフォアは早々に「第四党」と一線を画すようになる。第3次選挙法改正をめぐる対立、チャーチルの閣僚就任を経て、事実上の解体に至る。Winston Churchill, *Lord Randolph Churchill*, London, 1906, 2<sup>nd</sup> edn., 1907, pp.273-4; W.J.Wilkinson, *Tory Democracy*, New York, 1925, p.103; R.E.Quinault, 'The Fourth Party and the Conservative opposition to Bradlaugh, 1880-1888', *English Historical Review*, vol.XCI, no.359, April 1976, pp.315-33; Richard Gaston, *Lord Randolph's Sauce*, London, n.d., p.1; Max Egremont, *Balfour: A Life of Arthur James Balfour*, London, 1980, paperback edn., 1998, pp.55-9; Andrew Roberts, *Salisbury: Victorian Titan*, London, 1999, pp.243-4.
- 6 F.J.C.Hearnshaw, *Conservatism in England: An Analytical, Historical, and Political Survey*, London, 1933, p.230; R.F.Foster, 'To the Northern Counties station: Lord Randolph Churchill and the prelude to the orange card', F.S.L.Lyons & R.A.J.Hawkins (eds.), *Ireland under the Union*, Oxford, 1980, pp.246-55; Churchill, *op.cit.*, pp.221-2.
- 7 Times, 17 Dec.1883; Bendor Grosvenor, 'The man who would be Prime Minister, Sir Stafford Northcote Bart', *Conservative History Journal*, no.3, Summer 2004, p.26; David Steele, 'A New Style and Content: 1880-1885 and 1886', *Stuart Ball &*

- Anthony Seldon (eds.), *Recovering Power: The Conservatives in Opposition since 1867*, Basingstoke, 2005, pp.50-5; Martin Pugh, *The Tories and the People, 1880-1935*, Oxford, 1985, p.11; Janet Henderson Robb, *The Primrose League, 1883-1906*, New York, 1942, pp.31-2; Duncan Watts, *Tories, Conservatives and Unionists, 1815-1914*, London, 1994, pp.118-9; Paul Adelman, *Gladstone, Disraeli & Later Victorian Politics*, 3<sup>rd</sup> edn., Harlow, 1997, pp.36-7; Quinault, *op.cit.*, pp.331-2; Foster, *Lord Randolph Churchill*, p.72, pp.113-4; Roberts, *op.cit.*, pp.272-3.
- 8 各選挙区の基礎組織である保守党協会をロンドンの指導下に結集させるため、1867年に設立。保守党組織の草の根部分にあたる。Watts, *op.cit.*, pp.68-70; Adelman, *op.cit.*, pp.33-4.
- 9 David Steele, *Lord Salisbury: A Political Biography*, London, 1999, p.142; N.J.Crowson, *The Longman Companion to the Conservative Party since 1830*, Harlow, 2001, p.144; John Davis, *A History of Britain, 1885-1939*, Basingstoke, 1999, pp.22-3; Churchill, *op.cit.*, p.221.
- 10 1874-78年、1886-87年にアイルランド担当相、1885-86年、1895-1902年に蔵相を務めた保守党の有力者。
- 11 *Times*, 17 April, 9,19 May, 4 June, 24,25 July, 1 Aug.1884; Robert Rhodes James, *Lord Randolph Churchill*, London, 1959, pp.131-4, pp.140-54; Hugh Cunningham, *The Challenge of Democracy: Britain, 1832-1918*, Harlow, 2001, pp.121-2; Churchill, *op.cit.*, p.239, pp.288-9; Foster, *Lord Randolph Churchill*, pp.156-9; Roberts, *op.cit.*, pp.287-91; Pugh, *op.cit.*, pp.11-2; Robb, *op.cit.*, pp.31-3.
- 12 プリムローズ・リーグにかかわる詳細は、拙著『プリムローズ・リーグの時代：世紀転換期イギリスの保守主義』岩波書店（近刊予定）を参照。
- 13 *Morning Post*, 30 April, 17 Dec.1883; *Times*, 25 Jan.1895; Paul Smith, *Disraeli: A Brief Life*, Cambridge, 1996, paperback edn., 1999, p.208; Churchill, *op.cit.*, p.202; Hearnshaw, *op.cit.*, p.227; Egremont, *op.cit.*, p.58; Foster, *Lord Randolph Churchill*, p.116; James, *op.cit.*, pp.85-6, pp.97-8; Wilkinson, *op.cit.*, pp.65-6, p.79, p.90; 拙稿「プリムローズの記憶：コメモレイトされるディズレイリ」『人文学報』89号、2003年12月。
- 14 *Times*, 25,26 June 1885, 27,28 July, 4,5,11 Aug., 23,24,25,28,29,30 Dec.1886, 1,3 Jan.1887, 25 Jan.1895; James, *op.cit.*, pp.250-3, pp.274-97; Foster, *Lord Randolph Churchill*, pp.179-83, pp.245-68, pp.272-4, pp.299-314; Steele, *Lord Salisbury*, pp.173-4, pp.204-8; Roberts, *op.cit.*, pp.322-6, pp.394-422; Davis, *op.cit.*, pp.39-40; Pugh, *op.cit.*, p.26; Robb, *op.cit.*, p.48.
- 15 *Times*, 22,27,29 Dec.1887, 3,21,23,24 Jan.1888, 16 Feb., 9 March, 8,23 May, 29 June, 5,19,26 Oct.1893, 25 Jan.1895; John Greenaway, *Drink and British Politics*

- since 1830: A Study in Policy-Making, Basingstoke, 2003, pp.43-4; Foster, Lord Randolph Churchill, pp.346-7, pp.357-8, pp.362-3; James, op.cit., p.318.
- 16 Times, 25 Jan.1895; Winston S.Churchill, My Early Life: A Roving Commission, London, 1930, p.60; Churchill, Lord Randolph Churchill, p.235.
- 17 主治医は有名な神経系疾患の専門家ロブスン・ルーズであり、梅毒を専門とするトマス・バザードがルーズに協力した。より日常的に接触したもう1人の医師がジョージ・E.キースである。Times, 1 Jan.1895; Mrs.George Cornwallis-West, The Reminiscences of Lady Randolph Churchill, London, 1908, pp.218-9.
- 18 Times, 28 Dec.1894; James, op.cit., p.367.
- 19 Times, 28 Dec.1894, 1,25 Jan.1895; Churchill, Lord Randolph Churchill, pp.235-6; Cornwallis-West, op.cit., pp.239-40; James, op.cit., p.367;河合秀和『チャーチル：イギリス現代史を転換させた一人の政治家（増補版）』中公新書、1979年、1998年（増補版） pp.315-7.
- 20 1892年秋以来、チャーチル夫妻はチャーチルの母であるモールバラ公爵夫人と同居していた。一番の理由は夫妻の経済的な苦境である。Foster, Lord Randolph Churchill, p.349.
- 21 Times, 25 June 1894; Churchill, Lord Randolph Churchill, pp.818-9; Cornwallis-West, op.cit., p.232; James, op.cit., p.367.
- 22 Times, 20 Sept., 28 Dec.1894; Randolph S.Churchill, Winston S.Churchill: vol.1 Youth, 1874-1900, London, 1966, p.238; Cornwallis-West, op.cit., pp.251-68; Foster, Lord Randolph Churchill, p.379; 河合、前掲書、p.316.
- 23 ウィンストンが父の病の深刻さを知ったのは、おそらく1894年秋だった。11月8日付けの母への手紙にはこうある。「ほとんど回復が見られず、明らかに今後もさしたる回復のチャンスはないと聞いて、私はとてもとても落胆しています。」ルーズが真相を伝えたものと思われる。Churchill, Winston S.Churchill, pp.237-8.
- 24 チャーチルがインド担当相だった時期の第3次ビルマ戦争の結果、1886年にブリテン領にされるまで、マンダレイはビルマ王国の首都であった。
- 25 Times, 13,17,19 Nov.,17,25 Dec.1894, 25 Jan.1895; Churchill, Lord Randolph Churchill, p.819; Cornwallis-West, op.cit., pp.269-74; Churchill, Winston S.Churchill, p.236; James, op.cit., p.368.
- 26 Times, 25,27,28,29,31 Dec.1894, 1,2,3,4,17,18,19,21,22,23,24 Jan.1895.
- 27 Times, 27,28 Dec.1894, 17,21,22,25,26 Jan.1895; Churchill, My Early Life, p.76; Churchill, Lord Randolph Churchill, p.819; James, op.cit., pp.369-70.
- 28 Times, 25 Jan.1895; Foster, Lord Randolph Churchill, pp.380-1.

- 29 Times, 29 Jan.1895.
- 30 Foster, Lord Randolph Churchill, pp.380-1.
- 31 Primrose League Gazette, 1 Feb.1895; Pugh, op.cit., p.26; Robb, op.cit., p.48.1895年1月26日に採択されたグランド・カウンシルの決議はチャーチルを「ブリティッシュ帝国の最も輝かしい政治家の1人」と呼んでいるが、それより先に冠せられる形容はやはり「本リーグの創設者」である。Times, 28 Jan.1895.
- 32 Times, 25,26,28,29,31 Jan., 1,2,6 Feb.1895; James, op.cit., pp.370-2.
- 33 Times, 16 Feb.1895.もはや政治的に無力化して久しかったにもかかわらず、チャーチルの死はフランス、ドイツ、オーストリア、等では大きな反響を呼び、保守党を改革しようとし、道半ばで倒れた「保守党の中の民主主義者」、などといった好意的な評価が語られた。Times, 26 Jan.1895; Foster, Lord Randolph Churchill, p.380.
- 34 注3で述べたように、ジェニーと皇太子が愛人関係にあるとの噂は広く流布していたし、1876年にはチャーチルと皇太子が決闘寸前まで対立したこともあった。河合、前掲書、p.23.
- 35 Times, 26,28,29 Jan.1895; Churchill, Lord Randolph Churchill, pp.819-20; 前掲拙稿、pp.45-8.
- 36 Times, 26,28,29 Jan.1895; Churchill, Lord Randolph Churchill, p.819.
- 37 Times, 14 April 1896, 27 Feb., 3,23,28 March 1897; Churchill, Lord Randolph Churchill, p.820; James, op.cit., p.370.
- 38 鉄道駅に店舗チェーンを張り巡らせ、急成長を遂げたニュースエイジェントの二代目経営者。1868年に庶民院に当選、保守党の有力者として要職を歴任した。
- 39 Times, 3 March 1897; Foster, Lord Randolph Churchill, pp.301-5, p.324, p.374.
- 40 前掲拙稿、pp.54-6, p.74.
- 41 Times, 16,19 April 1898; Churchill, Lord Randolph Churchill, p.820.
- 42 Times, 19 April 1898; James, op.cit., p.370.
- 43 Times, 26 April, 17 May 1895.
- 44 Times, 24 June 1898; Churchill, Lord Randolph Churchill, pp.ix-xii, pp.821-3; Foster, Lord Randolph Churchill, pp.383-99.
- 45 Times, 1 Feb., 2 March 1906; Foster, Lord Randolph Churchill, pp.399-403.

本稿は拙著『プリムローズ・リーグの時代』を準備する作業のいわば副産物であり、2005年11月19日のヴィクトリア朝文化研究会第5回大会における発表「ディスプレイの記憶とプリムローズ」および拙稿「プリムローズの記憶」の姉妹編でもある。拙著、拙稿を併読していただければ幸いである。

(京大大学助教授)

## Randolph Churchill's Last Days and Beyond

Takashi KOSEKI

Having curtailed his journey round the world, Lord Randolph Churchill came back to England in a semi-comatose state on 24 December 1894. His health, which had been seriously undermined by syphilis since the early 1880s, finally collapsed in Madras, India. After spending his last month in London, he died on 24 January 1895.

Less than ten years before, Churchill's political fortune was at its peak. When the second Salisbury government was formed after the 1886 General Election, he became Chancellor of the Exchequer and Leader of the House of Commons at the age of only 37. Nobody but Salisbury was more powerful than him in the Conservative Party. However, his career was practically shattered by his sudden resignation in December 1886, which, to his dismay, Salisbury willingly accepted. During the rest of his life he was only to wander in the political wilderness without justifying the hopes he had inspired.

After his death the political career of Churchill was portrayed chiefly as a brilliant failure. With all his assets such as oratorical ability and untiring energy, it was argued, Churchill, essentially opportunistic and capricious, was not trusted by many and did not achieve much. Unlike Disraeli, whose unwaning popularity was clearly shown by annual commemorative events on 19 April, Primrose Day, held for more than a century, Churchill was never widely commemorated. After all, he was not regarded as a great statesman.

In 1906 the full-scale biography of Churchill, written by his son, Winston, was published. This highly acclaimed book certainly did much to destroy the dominant, largely negative, opinions on his father. However, it would be too much to say that Churchill was successfully restored to the position of a leading statesman. Today he is generally remembered, first of all, as the father of a famous statesman.